

マルティン・ヴァルザー研究

遠山 義孝

Eine Studie über Martin Walser

Yoshitaka TOYAMA

マルティン・ヴァルザーの著作を渉猟し、かれの人間観や自然観を紹介すること、つまりヴァルザーの文学世界を探究することが本研究の目的である。偶々1997年3月24日は、マルティン・ヴァルザーの満70歳の誕生日であった。そのため1997年は、ドイツ文学界は、ヴァルザー年の感があり、多くの資料を収集することができた。特に誕生日前後には古希を祝う文化記事や、かれの文学の位置づけを試みた評論が、ドイツの主だった新聞や雑誌に掲載され、またいくつかの関連番組がテレビでも放映された。その他、ヴァルザーが、70歳の誕生日を境に将来はいかなるインタビューにも応じない（“Jetzt ist Schluß damit”）と宣言したことも話題を呼んだ。

しかし、最大のイベントとしては、誕生日を期しての全集（12巻）の刊行を挙げることができよう（Martin Walser, Werke in zwölf Bänden, Herausgegeben von Helmuth Kiesel unter Mitwirkung von Frank Barsch, Suhrkamp 1997）。これは、まさにヴァルザーの40余年にわたる創作活動の集大成といえるものであり、あらゆる文学的ジャンルにわたる作品群が網羅されている。ヴァルザー研究家はもとより、ヴァルザー文学愛好家にとっても

必須の第1次文献である。ところで、作者の生前に全集(Gesamtausgabe)が出版されるということは、著名な作家の場合、ドイツでは珍しいことではなくなったが、ヴァルザーの場合にはズーアカンフ社側の意向による古希祝賀記念の出版の趣きがあるのはいなめない。というのは、純文学の作家としては異例の生産的・精力的な活動で知られるヴァルザーが、以後書かなくなるなどということは、考えられないからである。事実、今年(1998年)になって、マルティン・ヴァルザーが、新作長編小説を執筆中ということが報じられた。「現在としての過去」(Vergangenheit als Gegenwart)がテーマで、小説のタイトルは“Ein Springender Brunnen”(『湧き出る泉』)、ナチスの時代が舞台という。第三帝国の時代に自分の経験したことを小説化することは、ヴァルザーにとって長年の懸案事項であった。20数年間の予備作業を経ての執筆ということであるから、年来のテーマの総括ともなろう。小説は第1部1932/1933年の叙述に始まって、第2部1938年、第3部1944/1945年の構成がとられているという。今秋の刊行が待ち遠しい。1997年度は、本研究の初年度ということもあって、資料収集を中心とした予備的研究があてられた。